



作家・紫芳会顧問

## 三浦 朱門君 (中学39期) の思い出

～ 2017年2月3日逝去 享年91 ～

佐藤 喬氏 (中学39期) 寄稿

府立二中から旧制高知高校を経て東京大学文学部言語学科卒業  
 日本大学芸術学部教授、中部大学女子短期大学学長、文化庁長官、教育課程審議会会長、日本文藝家協会理事長、日本芸術院院長など歴任  
 『箱庭』第14回新潮社文学賞受賞  
 『武蔵野インディアン』芸術選奨文部大臣賞受賞  
 著書・共著多数 作家の曾野綾子氏は妻



妻・曾野綾子氏との共著  
『我が家の内輪話』

三浦君は東京府立二中の同期生(第39期)である。この期は文化勲章を受章した医学の石坂公成君等、幾多の俊秀を輩出したが、有名作家で文化庁長官や芸術院長等要職を歴任した三浦君も、その英才達の一人であった。

私の二中入学は1938年で、三浦君はA組、私はC組だったから、特に親しかったわけではない。しかし三浦君は辞書を片手に英米の小説を原書で読む文学少年、と聞いていたので、同じく文学少年だった私はひそかに親しみを感じていた。

ある日私が立川駅のホームで「ポケット・オックスフォード英語辞典」(POD)を引いていると、「おい、すごい辞書を持ってるな」と私の手許をのぞき込んだ人がいた。目を上げると、三浦君だった。私がびっくりして、「お前、PODを知ってるのか」と聞くと、彼は苦笑して、「英語の専門家が使う辞書だろ。ちょっと貸してみろ」と言ってパラパラとページをめくり、「ふーん、これがPODか」と言った。そこへ彼の友人が二、三名来たので、彼は立ち去った。

私は、「二中生にも、PODを知ってるやつがいたんだな」と、いささか心強い気がした。

何しろ当時のわが国は英米と戦争中で、英語は敵性語と呼ばれ、英語の勉強などしていると非国民と呼ばれた時代だったからだ。

卒業後、別の道を歩み、接点はなくなったが、彼の書くものは注意して読むようにしていた。多分1967年ごろだったと思うが、三浦君が三田文学会に講演にきたことがある。この時私は二中卒業後初めて彼に会った。私が名乗ると、やっと思い出したようだった。その日彼は「ピープスの日記」の話をした。これは17世紀の英国の海軍大臣ピープスが暗号を使って書いた奇書で、私は英文学者という立場上、一応目を通したことはあるが、今どきこんなものを読む人はめったにない。私は何となく、三浦君らしいな、と思った。

その後彼とはかけ違って会う機会がないまま、いつのまにか五十年という月日が流れ、この2月5日、「朝日新聞」の朝刊で、私は三浦君がその2日前に91歳で亡くなったことを知った。当然ながら、私とは同年だった。私は「長い間、同じ時代を一緒に生きてきたな」という感慨から、若いころのエピソードを書き、それが「朝日」の投書欄に載り、今回「紫芳会だより」に寄稿するきっかけとなった。拙文が母校の同窓諸氏の目にふれることを、真に光栄に思う。三浦君の冥福を祈る。



佐藤 喬氏 慶應義塾大学名誉教授(中学39期) 写真は平成2年3月 慶大名誉教授 就任記念(65歳)  
 1925年東京生まれ。杉並第五小学校、東京府立二中、東京高等師範学校英語科を経て、1953年東京教育大学文学部英文科卒業。同大附属中学校英語科教諭となる。1961年フルブライト給費生としてミシガン大学に留学。翌年帰国して東京教育大学文学部講師。1964年慶應義塾大学専任講師。助教授、教授を経て、1990年同大名誉教授となり、退職。

その後、名古屋明德短大英語学科長、明海大学教授を歴任。1995年、満70歳に達したのを期に、すべての役職を辞して引退。

引退までの約30年間に兼任した職務は学習院大、お茶の水女子大、日本女子大、大妻女子大、共立女子大、鶴見大、外務省研修所等の各講師。日本英語教育研究所長、日本翻訳家協会等各学会理事。著・訳書多数あり。

趣味は読書と尺八の吹奏。